

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

新年を迎えた森上基幹センター、地域の子供会や青年の会が企画した伝統行事で子供たちの笑顔に出会う。地域から文化的な伝統行事が衰退する中で、地

域の子供たちに、地域への愛着を育んでほしいと毎年続けられている。各家庭から正月飾りを回収しての「どんと焼き」や「まゆ玉づくし」と呼ばれる餅飾りづくり。  
子供たちは、用意された枝や団子で楽しんで作っていく。説明しなくても楽しそうに作る様子に不思議がっている。「保育園などで作った経験があるので」との説明に、幼児教育の実践効果を実感する。年々、子供たちの数が少なくなってきたのも確かだ。これまでも、少子高齢化社会で人口減少が続けば将来深刻な事態を

招く恐れとの指摘をしてきた。  
知人から、別の視点の見方があると「人口と日本経済」の本を紹介される。著者は日本を代表するマクロ経済学者の一人で、ニューヨーク州立大学助教

## 人口減少問題を考える時、悲観論でない視点もあつたことに関心を持ってみませんか

授、東京大学大学院教授などを経て、現在は立正大学教授を務める吉川洋さんの著書だ。人口と経済成長には統計上あまり関係ない事実を、多くのデータと経済学的見地から解き明かす内容だ。  
そして、先進国における経済成長の源泉が「労働生産性」の向上であると示した。寄与するイノベーションが大きな需要を生み出していると説明。「イノベーション」とは、物事の「新しい切り口」。

日本国は減びて行くのか。そうではない」との著者の考えに共感してしまう。  
人口減少の悲観的な状況の中「脱日本で海外事業の展開」、「グローバル化しか生き残る道は無い」との空気がまん延する中、地域の観光資源で成り立つ経済基盤の、国内市場で生きて行かなければならない状況に置かれた経済関係者は是非読んでほしい内容だ。  
国立社会保障・人口



伝統の意味を説くよりも、継続する事で見聞させ、子供たちを育てる地域に住むありがたさを知る

問題研究所の将来推計では、2110年までに4200万人まで減少との推計、歴史を振り返れば、江戸時代約3000万人、大正9年約5000万人、歴史的には、現在の人口

こそが特異との視点。人口での問題意識を考える時に、多くの視点も学ばせてくれた著書でもあった。  
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)